伝統的性役割に関する意識

——フェミニズムからの分析——

黒　木　雅　子

I　はじめに

1960年代のアメリカで始まった第2期女性解放運動が提起した重要な問題の一つに、性差別を支えてきた伝統的な性役割観からの意識変革がある。その主張のなかで、「女らしさ」「男らしさ」という言葉で表わされる男女の特性の多くは、性によって異なる社会的文化的価値の学習の結果であることが強調された。そこには役割そのものよりも性による役割の固定化が，女性にとっても男性にとっても抑圧的であるという認識がある。

従来より、女性の役割と規定されてきたのは、妻と母親という家庭内役割であり、この2つの役割を果たさない女性は逸脱と見られてきた。それは、結婚していない女性、自分の主なエネルギーを献身的に男性と自分の子供に注がない女性をスティグマとして見る態度につながる（Freeman, 1979)。しかし、意識の変容はゆっくりでも、女性の社会進出は着実にすすんでいる。

アメリカにおける女性解放運動の第二波の口火をきったといわれるベティ・フリーダンの『新しい女性の創造』（原題 The Feminine Mystique, 1963）が発表されてから1／4世紀を経たが、その間私たちは女性の生活に影響を及ぼす様々な社会的変化を目にしてきた。

最近では、かつての「仕事か家庭か」という選択型から「仕事も家庭も」という統合型を選ぶ女性が増えている。しかし、家庭と仕事の二重負担からくる様々な困難、ストレスをくぐり抜ける中で、「家庭に戻り、子育て終了後に再就職する」という仕事中断の声は働く母親にとって魅力的に聞こえる。

フリーダンは、男性をモデルにした仕事の在り方を変えずに「仕事も家庭も」という考え方がすすめば、かえって新しい「女性の神秘」(New Feminine Mystique) によって、再び女性を家庭に引き戻すことになると警告している(Ms. 1988,12 月号)。

日本の社会でも男女平等の原則は公認され、一般論としては、女性役割を家庭内に限定することが疑問視されるようになってきている。しかし、仕事を選ぶ女性が増えれば増えるほど、新しい「女性の神秘」は再び現われてくる。クロワッサン症候群というのも、シングルキャリアーウーマンに対して新装を施した「神秘」を提供するのに十分であろう。

本稿では、伝統的性役割に対して、どのような態度がもたれているか、フェミニスト志向性を見ようとしたものである。

フェミニズムの解釈は多様であり、その基本的な意味は現在でも論議の的である。広い意味では、フェミニストを、個人の成長と力への機会が男と女に平等に与えられるべきであると信じている人と定義できるであろう (Malamuth, 1983)。従って、理論的には男性もフェミニストの視点をもつことは可能である。

一般にフェミニズムは、狭義では女権拡張主義、広義では女性解放思想のことである。フェミニストのなかには、男女の社会的平等の必要性を認識さえあればどのようなアプローチもフェミニズムとすることに対してフェミニズムそのものの意味を失うと主張するものと、フェミニズムとそうでないものを排他的に分類することは危険であると反論するものもいる。フェミニズムのもつジレンマである。

本調査の目的は、伝統的性役割に関する態度が性別によってあるいは女性を世代別、仕事の有無で見た場合に違いがあるかどうか、またあるならその役割への期待がどのように違うかを明らかにするための試みである。

Ⅱ　調査概要

1　実施方法

本調査は1985年７月、大阪の某専門学校の受講生を対象に、昼と夜のクラスで筆者が実施した。本調査の質問項目の作成および採点法については、フェミニストのセクシュアリティについての態度を測定するスケール（Malamuth, 1983）を参考にした。

昼と夜のクラスで調査用紙を配布し、記入後回収した。回収率は76%であった。採点方法は、12の質問それぞれに対して、非常に反対（全くそうは思わない）に１点、やや反対（そう思わない）に２点、やや賛成（そう思う）に３点、非常に賛成（全くそう思う）に４点を与えた。12問中、フェミニストの意見や態度を示す６問（質問１、２、４、６、９、11）の得点合計から、残りの伝統的性役割を示す６問（質問３、５、７、８、10、12）の合計を差し引いた得点が12点以上の場合をフェミニスト志向性が強いとした。

2　調査対象者

対象者の分布は表１と表２のとおりである。この中で、仕事を持つと答えた者は、フルタイムとパートタイム就労者である。また20代で無職と答えた者の中には学生も含まれている。

表１　対象者の仕事の有無

女性

年　代		20代	30代	40代	50代以上	合計
仕事	有	34	41	11	5	91
	無	20	4	15	4	43
	N／A			2		2
合計（人）		54	45	28	9	136
有職率		63%	91%	39%	56%	

表2　対象者の仕事の有無

男性

年　代		20代	30代	40代	50代以上	合計
仕事	有	4	9	5	1	19
	無	3	0	0	0	3
合計（人）		7	9	5	1	22

3　質問内容と回答方法

ここで、質問紙の内容を紹介する。

次の12の質問に対してあなたはどう思いますか。1非常に反対（全然そうは思わない）、2やや反対（そう思わない）、3やや賛成（そう思う）、4非常に反対（全くそう思う）のうち一つを選んで、その番号を回答用紙に入れて下さい。なおこれらの質問は、正しいか間違いかを問うものではありません。

1　女子の教育は良妻賢母主義だけではいけない。

2　妻の仕事は夫の仕事と同様に重要である。

3　妻が働かなくても家族を養うのが男の甲斐性である。

4　女性が同年代の男性とデートをする時は費用を割り勘にするべきである。

5　妻が働きにでるなら家事に支障のない程度にするべきである。

6　不幸な夫婦関係を続けるより、離婚するほうが子供にとってよい場合がある。

7　男性は人前で涙を見せるべきでない。

8　男性は、セックスやその他の愛情表現においていつもイニシャティブをとるべきである。

9　共稼ぎの夫婦なら家事、育児を分担するべきである。

10　男性が台所にはいるのはみっともない。

11　結婚前の性行動の許容度が男性と女性で異なるのはおかしい。

12　非行にはしる子供は共稼ぎの家庭に多い。

Ⅲ　調査結果と考察

1　調査結果

本稿では、伝統的性役割に関する態度を、女性の世代別、仕事の有無、また性別によって見るため、以下の検定を試みた。その結果はつぎのとおりである。

12問の各平均値を女性の世代別で比較したが、一部有意差があった（表３）。同じく、12問の各平均値を男女別に比較して一部有意差が見られた（表４）。

表３　各質問における女性の世代別平均値*と標準偏差値

世代	20代	30代	40代	50代以上	世代差
N	54	45	28	9	
	$\bar{X}$ （SD	$\bar{X}$ （SD）	$\bar{X}$ （SD）	$\bar{X}$ （SD）	
1	3.28 (0.62)	3.53 (0.50)	3.21 (0.67)	3.22 (0.63)	
2	3.46 (0.60)	3.49 (0.50)	3.43 (0.56)	3.67 (0.47)	
3	2.24 (0.72)	2.27 (0.83)	2.36 (0.67)	2.22 (0.91)	
4	2.87 (0.55)	2.71 (0.78)	2.75 (0.69)	3.44 (0.50)	P＜0.05
5	2.48 (0.63)	2.20 (0.83)	2.43 (0.56)	2.78 (0.79)	
6	2.57 (0.68)	2.96 (0.73)	2.75 (0.83)	2.44 (0.68)	
7	1.91 (0.78)	1.89 (0.64)	2.32 (0.60)	1.89 (0.30)	P＜0.05
8	1.93 (0.64)	1.93 (0.61)	1.96 (0.42)	2.11 (0.31)	
9	3.22 (0.68)	3.29 (0.65)	3.32 (0.54)	2.89 (0.74)	
10	1.65 (0.48)	1.56 (0.62)	1.64 (0.48)	1.78 (0.42)	
11	2.98 (0.78)	3.31 (0.63)	3.04 (0.63)	3.11 (0.74)	
12	1.87 (0.55)	1.80 (0.69)	2.04 (0.68)	2.11 (0.31)	

＊非常に反対：１、やや反対：２、やや賛成：３、非常に賛成：４、とコード化したものの平均　　df＝３、132

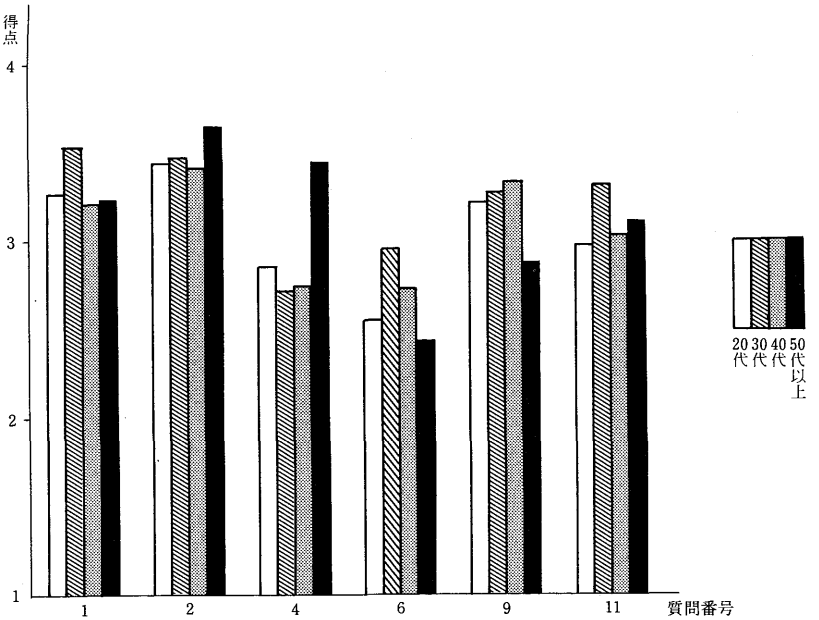

図1　世代別女性の平均値フェミニスト志向性

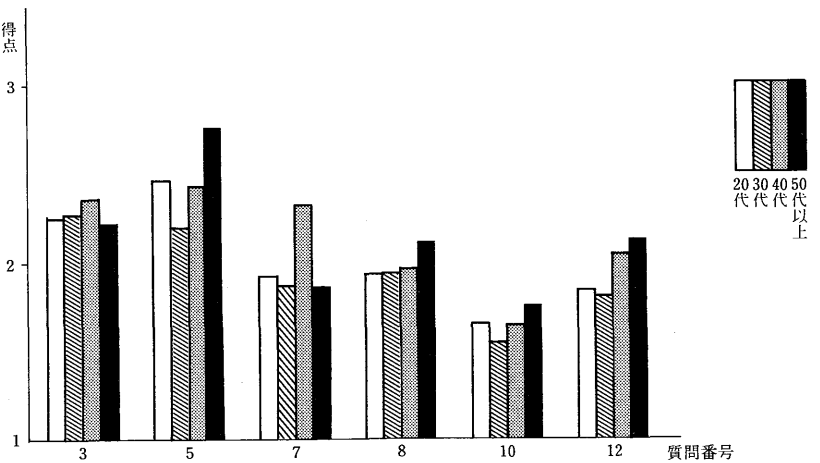

図2　世代別女性の平均値伝統的性役割観

表4　各質問における男女別の平均値*と標準偏差値

	男性	女性	男女差
N	22	136	
	$\bar{X}$（SD）	$\bar{X}$（SD）	
1	3.05 (0.90)	3.35 (0.61)	
2	3.38 (0.65)	3.48 (0.56)	
3	2.71 (0.76)	2.27 (0.76)	P＜0.05　df＝155
4	2.48 (0.73)	2.83 (0.68)	P＜0.05　df＝155
5	2.62 (0.84)	2.40 (0.72)	
6	2.43 (0.95)	2.73 (0.75)	
7	2.19 (0.96)	1.99 (0.70)	
8	1.86 (0.47)	1.95 (0.57)	
9	2.86 (0.71)	3.24 (0.66)	P＜0.05　df＝155
10	1.86 (0.71)	1.63 (0.53)	
11	2.86 (0.71)	3.11 (0.71)	
12	1.9 (0.68)	1.90 (0.62)	

＊非常に反対：1、やや反対：2、やや賛成：3、
非常に賛成：4、とコード化したものの平均

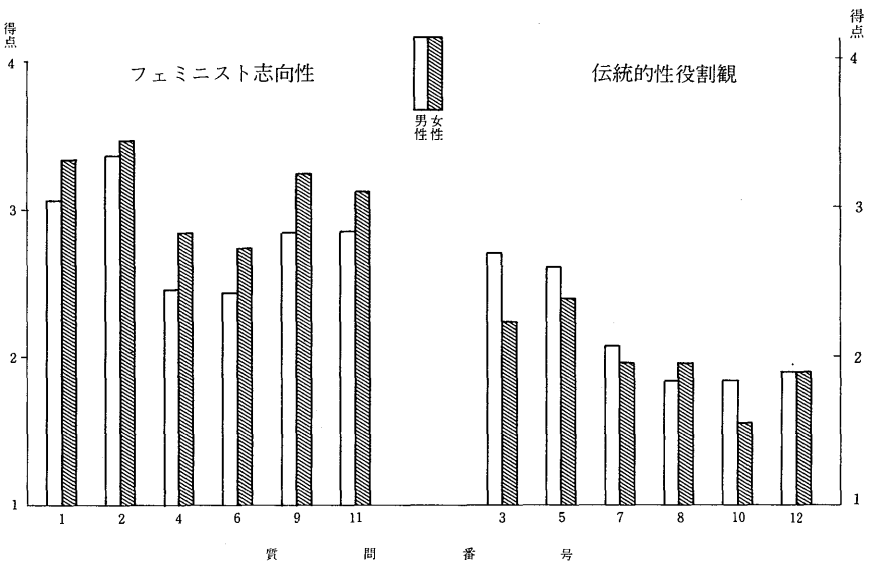

図3　男女の平均値

総得点にフェミニスト志向性が見られるかどうか、12点以上の総得点をもつ者の割合を女性の世代別で比較して、有意差があった（表５）。つぎに総得点の平均値を女性の仕事の有無という条件で見たが有意差はなく、さらに仕事の有無によって総得点にフェミニスト志向性が見られるかどうか検定を行ったが、ここでも有意差は見られなかった。また、総得点の平均値を女性の世代別で比較したが、有意差は見られなかった。一方総得点の平均値を男女別で見ると、有意差はあった（表６）。

表５　世代別女性のフェミニスト志向性

世代	20代	30代	40代	50代以上
総得点12点以上の割合	９％（５人）	24％（11人）	７％（２人）	０％（０人）
N	54	45	28	9

$P<0.05$　df＝３

表６　男女別総得点の平均

	男	女
N	22	136
$\overline{X}$（SD）	3.90（3.66）	6.59（3.89）

$P<0.01$　df＝155

総得点の広がりに差があるかどうか検定したが男女別でも、女性の仕事の有無でも有意差は見られなかった。

本調査では男女のサンプル数および、女性の世代別サンプル数に偏りがあるので、この結果から一般化した結論は出せない。そこで、ここでは本調査を補うため他の調査研究を引用して考察をおこなうことにする。

２　考　　察

a　世代別、男女別でみた各質問の平均値

まず、女性の世代別比較（表３）と男女別比較（表４）の平均値より、各質問ごとに伝統性役割を考察することにする。女性の世代別４グループを比較するにあたり分散分析を用いた。また、男女の比較には、まず２つの集団の分散の差があるかどうかＦテストで調べ、同じならｔテストを用い、差があればコクラン・コックスの法を用いて検定を行った。

質問１

「女子の教育は良妻賢母主義だけではいけない」

女性に期待されていたのが子供を産むことであっても、教育する母（賢母）が規範として要求されるようになってきたのは、近代以降といわれている。やむを得ない事情で仕事につくことはあっても、本来の女性の役割は家庭生活を担うものであるから、女子教育の目的は、仕事について国家社会のために役立つ男子の教育とははっきり区別されていた。

このような女性の役割が、長寿、少産、家事の合理化などによってもたらされた女性の生き方の変化に対応したものとは言いがたい。

こういった認識があるかどうかは別として、上記のような質問に対して、女性の世代別、男女別どのグループをみても「やや反対」という回答をしており、平均値に有意差はなかった。

質問２

「妻の仕事は夫の仕事と同時に大切である」

この質問に対する回答を、世代別（女性）で見ても男女別で見ても、「やや賛成」という回答に有意差はなかった。ただし、世代別（女性）比較を見ると、この質問に対する賛成度の一番高い世代が50代以上、そして30代、20代、40代と続く。表5のフェミニスト志向性は、30代がもっとも高く、年令が高くなるにつれてその志向性は低くなっている。この世代別フェミニスト志向性と質問２の回答結果とは矛盾するように見える。

また、筆者が1983年に日系アメリカ人を対象に行った調査（黒木、1986）で同じ質問をしたが、その結果とも矛盾する。日系アメリカ人の３世代を見ると、

「妻の仕事も重要」と考える人は3世（平均年令30歳）が最も多く、その割合は1世（平均年令84歳）、2世（平均年令60歳）の順に少なくなっていた。

1983年と本調査の2グループ(30代と50代以上）の回答結果が相反するが、その説明としてつぎのことが推察される。本調査の対象者が、質問2の「妻の仕事」を賃労働だけでなく家庭での妻の仕事を含めて広義に理解したようである。先の日系アメリカ人の調査は英語で行ったため対象者の言葉の理解と筆者の意図とのくい違いは生じなかった。「妻の仕事」とは家庭外の就労だけをさすのではないのである。本調査で用いた「妻の仕事」というあいまいな言葉については今後検討する必要はあろう。

質問3

「妻が働かなくても家族を養うのが男の甲斐性である」

女性の世代別比較では、「やや反対」という回答に有意差はなかった。

男女別で見ると、男性の方も「やや反対」に傾いているとはいっても男性と女性の回答の間には有意差（$P<0.05$）があり、男性のほうが女性より家族の扶養を男の甲斐性とする傾向は強かった。女性は男性ほどそれに期待していないということだろうか。

質問に対して答えやすいように日常的な言葉を使って質問を作成したが、ここで使った甲斐性（経済的能力）という言葉に対する心理的抵抗もあったのだろうか、回答はどのグループも「やや反対」を示している。

男性の性役割に関して、日本ではほとんどの人（女性だけでなく男性自身も）が「稼ぎがあること」を最も重要な要件としてあげている（東、小倉、1984）という。「夫は仕事、妻は家庭」という性役割分担が女性だけでなく男性にとっても思い重圧となっているということが言われはじめている。しかし、性役割からの逸脱によっておこるストレスよりも同調によって生じるストレスのほうを選択する男性はまだ多いようである。

質問4

「女性が同年代の男性とデートする時は費用を割り勘にするべきである」

アメリカのレディー・ファーストという習慣が男女平等に反するというフェミニストの主張から見ると、デートの費用についても同様のことが言える。

女性の回答を世代別比較すると、4グループの平均値に有意差が見られた（P＜0.05）。さらにこれを詳しく見ると、30代と50代以上の間で（P＜0.01）、また20代と50代以上（P＜0.05）で有意差があった。20代、30代、40代が、デートの費用折半に、「やや反対」と答えているのに対して、50代以上のグループが「やや賛成」の中でも最も高い点数を示すという興味深い結果をえた。ここでも年令の一番高いグループがもっとも、フェミニスト傾向が強いことを示している。

権利の主張と責任（分担）を負うこととは切り離せないはずであるが、この他の質問でフェミニスト志向を比較的強く示している30代がここでは伝統的役割を持つのはなぜだろうか。

男女別比較では、男性も女性も「やや反対」と答えているが、両者間に有意差が見られた（P＜0.05）。費用折半にはむしろ男性の方に抵抗があるようである。

質問5

「妻が働きにでるなら家事に支障のない程度にするべきである」

この質問に対する回答は、女性の世代別、男女別の両比較において有意差は見られず、どのグループも「やや反対」という回答であった。

ところで朝日新聞の1988年、第11回定期国民意識調査の結果をみると、妻が外で働くことには7割近くが賛成している。ただし家事、育児をこなした上でという条件つきが52％もあり、「家事、育児は妻の仕事」という意識は根強いことを示している。

女性自身の意識はパートタイマーの増加にも現われている。女性パートタイマーは1960年より著しく増加し、1986女子雇用者の22.7％（日本婦人団体連合会、1988）を占め、その中でも中高年既婚者の割合は大きい。人件費を少なくしたいという企業と家事に支障のない短時間雇用で働きたいという主婦層の希

望（それは夫の希望でもあるのだが）が合致した結果である。彼女たちのうちでパートタイム就労から正規雇用に移りたいという者は少なく、78%は現状維持希望で、そのほとんどが「勤務時間の都合」を理由にあげている（平野、1984)。ただし中高年女性が正社員として中途採用されにくいという情況が彼女たちをパート就労に向かわせているという点も無視できない。

質問6

「不幸な夫婦関係を続けるより、離婚するほうが子供にとってよい場合がある」

女性の世代別比較と男女別比較のどちらも有意差はなく、「やや反対」という回答を得た。未成年の子供のある離婚は67.1%（日本婦人団体連合会、1988）を占るというが、本調査ではこれに対して意識の上では反対を示している。ただし女性4グループの中では30代が最も離婚に対する反対度が弱い。

前述の朝日新聞の国民調査では、結婚相手とうまくいかない時の離婚に対して、賛成と反対の割合が、45%づつで二分された。離婚がやむをえないというのは若い世代に多く、年配になれば低下した。

その調査では、「結婚十年選手」の30代後半で離婚肯定派が過去7年間に増加しているという。1987年に最高裁のまとめた離婚調停申し立て情況によると、申し立て者の平均年令は、妻が38歳、夫40歳である。この年頃が人生のやり直しと考える時であろうか、40代になると離婚の否定派が多数になっているという。

質問7

「男は人前で涙をみせるべきでない」

女性を世代別に見ると20代、30代、50代以上の3グループは「非常に反対」、40代グループは「やや反対」という回答で、世代別グループ間に有意差はあった（$P<0.05$)。これをさらに詳しくみると、30代と40代の間で有意差があり（$P<0.05$)、また20代と40代でも有意差はあった（$P<0.05$)。40代が4グループのなかでもっとも、男の涙に対しては伝統的な態度を示している。

男性と女性を比較してみると、男性は「やや反対」、女性は「非常に反対」と

回答したが、両グループ間に有意差はなかった。

一般に日本はアメリカと比べて、男性の涙は受け入れられやすい文化的土壌がある。それに対してアメリカの伝統的な男らしさの理想の一つは、感情の自然な表現を押さえつけることであり（コマロフスキー、1976)、フェミニストたちが「やさしさは強さである」(Gentleness is strength）と言わねばならぬ程、男性にとって感情をおし殺す神経や筋肉の鎧が必要なのだ。

本調査結果を見るかぎりでは、女性は男性ほどこの質問内容については期待していないようである。

質問 8

「男性はセックスやその他の愛情表現において、いつもイニシャティブをとるべきである」

男性がリーダーシップをとり、女性が従うという伝統的性役割の神話のパターンに対してどう考えているだろうか。

女性の世代別比較では、40代のみが「やや反対」と答え、あとの３グループは「非常に反対」であった。ただしこれら４グループ間に有意差はみられなかった。

男女別比較では有意差はなく、両グループとも「非常に反対」と回答した。ただし、女性の回答が男性のそれよりも伝統的傾向を示したのは12問中ここだけであった（図３)。

女性役割と男性役割は、主体と対象、支配と従属の関係の反映ともいわれているが、この関係は当然セクシュアリティにも現われる。

セクシュアリティに関する規範は容易に変化しにくい強固な規範であるといわれているが、一般論として答えているのであろうか本調査の回答結果からは伝統的傾向は認められなかった。

質問 9

「共稼ぎの夫婦なら、家事、育児の分担はするべきである」

女性を世代別に見ると４グループ間に有意差はなかった。ただし20代、30

代、40代の回答は「やや賛成」に対して、50代以上のグループは「やや反対」と答えている。50代以上の女性は、他の世代と比べて、共稼ぎ夫婦の家事、育児の分担を当然とみる傾向は弱い。

男女別で見ると有意な差があり（$P<0.05$）、女性は「やや賛成」に対して男性は、「やや反対」という回答を示している。つまり男性の回答は、「男は仕事、女は家庭」という役割分業はそのままで女性の外での仕事が増えるのは（妻の二重負担）は賛成ということである。

ここで現われた男女の意識の差はつぎの調査でも裏付けられる。1981年の総務庁の調査によると、共稼ぎ世帯の妻の家事、育児に費やす時間は平日で3.36時間、日曜日は3.57時間。これに対して夫は平日で３分、日曜日は10.2分（婦人教育研究会、1987）である。

これでは分担どころか手伝いにもなっていない。いまでも、皿洗いをする夫は話題になるのである。アメリカの男性ジーン・マリンは男性の皿洗いは男性が手伝っているのではなくて、自分自身の責任分担を果たしているにすぎないという（マリン、1975）。日本では家事は母親の肩だけにかかるが、アメリカでは、夫はもちろんこどもや家族全体で行う場合が多い。日本では男性は仕事に、子供たちは塾や勉強で忙しいのであろう。

質問10

「男性が台所にはいるのはみっともない」

女性の世代別比較と男女別比較の両方で有意差は見られず、どのグループも「非常に反対」と回答している。

かって女性の領域であった台所に男性が入って料理をすることは、男性だけでなく女性からもいやがられた。この調査を見る限りでは「男子厨房に入らず」は少しづつくずれているようだが、それでも男性の皿洗い同様、男の料理が特別視される傾向は残っている。

質問11

「結婚前の性関係の許容度が、男と女で異なるのはおかしい」

女性の性に対する男性本位なとらえ方は、メディアだけに限らない、戦前からの性の二重規範（男性に寛大で女性には厳格）は今も根強い。ヴィクトリア時代の道徳の名残りである二重規範は、社会生活のすべての領域において見られる、男女間の力と特権の差を反映しているのである（Law and Schwartz, 1977)。ここではこの性の二重規範に対する態度を調べようとした。

結果は、女性の世代別グループ間には有意差はなかった。しかし、質問内容が一番身近であるはずの20代は「やや反対」(「二重規範に対してあまりおかしいと思わない。」）と答え、4グループの中でもっとも伝統的傾向であった。これに対して30代、40代、50代以上の3グループは「やや賛成」(「ややおかしいと思う」）という回答を示している。この結果を見る限りでは、性の二重規範は若い層で強いようである。

大学生の性規範の調査を1971年と1981年で比較した研究によると、性に対して全搬的に許容的になってきているが、伝統的二重規範も深まっており、しかも男子だけでなく女子にも、その内面化が見られたという（善積、1983)。

本調査では、男性と女性の平均値に有意差はなかったが、男性の平均値が「やや反対」(おかしいとあまり思わない）を示しているのに対して、女性の方は「やや賛成」(ややおかしいと思う）を示している。男性より女性の方がこの規範に対して疑問を持っているようである。

質問12

「非行にはしる子供は共働きの家庭に多い」

女性の世代別4グループ間に有意差はなかった。しかし、20代と30代は「非常に反対」を、40代と50代以上は「やや反対」、を示している。非行と共働き家庭との関係を否定する人は年齢が高くなるにつれて、弱くなる。男女別平均値に有意差はなかった。

母親の就業と子供への影響を調べた調査（総理府広報室、1987）で、20代から70代以上の女性の回答を見ると、本調査結果と同じく「悪い影響がある」という回答がもっとも少なかったのは30代で、その後年令が高くなるにつれて

多くなっている。

それでは、子どもたち自身は母親の就業に対してどのように感じているのだろうか。母親の就業に対する感じかたは子供の成長につれて変化するようだが、例えば「小学校のころ母に仕事をやめてもらいたいと思ったか」の問いに対して、比較的母親の就業を受け入れている（高橋、1986）という調査報告もある。

母親の就業と子どもへの影響について、実際には、母子分離をはじめてよい時期、分離していても安心できる時間の長さ、一時的分離が一様に弊害があるかどうかなどは実際にはわかっていない（ミュルダール／クライン、1985)。

女性が仕事を続ける場合の最大の悩みはこどもである。働く女性が増えたといっても、いやむしろそれゆえに、仕事を持つ母親たちが子供に取り返しのつかない犠牲を強いているのではないかという不安やうしろめたさを抱かせるような、有形、無形の社会的プレッシャーは存在する。

女性を「女の居場所」に引き戻すものの一つに罪悪観がある（Schaef, 1981）というが、まさに働く母親にとってもそれは大きく機能する。年代が高くなるにつれて、質問に対する反対度が弱いのは、母親たちの不安とも推察できる。

b　女性の世代別フェミニスト志向性と総得点の平均

総得点の計算法はすでに述べた。12点以上の得点者（フェミニスト志向をもつ）の女性を世代別で（表５）見ると、４グループ間に有意差（$P<0.05$）はあった。30代がもっとも男と女の役割に対して平等志向性が高く、つぎに20代、40代、50代以上の順で年齢が高くなるほど、伝統的性役割も全体に強くなることが示唆される。またこの調査の一部でも、一般に言われている若者の保守化傾向は確認された。

50代以上の女性グループと男性には12点以上の得点者はなかった。女性に対する態度を性別、世代別に調べた調査報告によると、50代の女性は男女平等意識が低調のようで、平均得点は男性と近似していた（東、小倉、1984）と

いう。

また、「男は仕事、女は家庭」という考えに対して総理府の調査（総理府広報室、1987）では、これに同感しないと答えた人の割合が30代にもっとも多く、つぎに20代、40代、50代という順で伝統的性役割に反対するという結果を得ている。本調査はその総理府の調査結果を支持するものである。

ただし、これら世代別回答結果をフェミニスト志向性との関連だけで解釈できないところもある。というのは女性の年代に応じて、現実の生活で出会うであろうライフサイクルの課題が大きく反映していることも考慮しなければならないからである。

世代別比較をさらに、女性の総得点の平均値で見るため、分散分析で検討してみたが、これには有意差は見られなかった。同じく４グループの分散の同質性の検定を行ったが、これも異なるとはいえなかった。

c　総得点の男女別比較

次に総得点の分散に男女差があるか、Ｆテストで検定したが有意差はなかった。そこで二つの分散が互いに等しい場合の平均の差を見るためｔ検定を用いたところ、男女の平均値（表６）では有意差（$P<0.01$）が見られた。男性対象者では女性の50代グループと同様12点以上の得点者はいなかった。

前述した東らの調査によると、男性の平等意識は女性より低調で、大学生であろうと、中高年齢者であろうと、変わらないという。

伝統的性役割観に見られる男女のギャップについては多くの人が指摘するところであり、ここでも確認できた。そのギャップは10年遅れとも20年遅れとも言われているが、女性たちからの警告を受け止める感性のある男性が増えることを多くのフェミニストたちが望んでいる。

d　仕事の有無による総得点の平均

女性の仕事の有無によって性役割に対する態度に違いが見られるであろう

か。総得点の分布と総得点の平均を仕事のもつグループともたないグループで比べたが、両グループ間に有意な差は見られなかった。さらに、仕事の有無によってフェミニスト的志向をもつ者の割合が異なるかどうか検定したが、有意差は見られなかった。ここでいう仕事の中には、フルタイムとパートタイムが含まれている。

フェミニストの女性と「仕事をばりばりしている女」というイメージは結びつきやすいかもしれないが、こういったステレオタイプを持つと時々裏切られることがある。この調査からも、仕事の有無とフェミニスト志向性とは直接の関係があるとはいえないようである。

Ⅳ　まとめ

この調査では、妻と夫または一般に男女があるべき姿として期待される役割についてどのような態度を示すかを明らかにしようとした。対象者が質問に対して一般論として答ようとしたところもあり、必ずしも現実に自分がそのような態度をとるとは限らない。しかし、少なくとも一部の女性には伝統的性役割観の変化が見られた。

質問３、７、８、10で男性の役割を聞いているが、現われた結果をみる限りでは、女性は男性ほど強くて頼れる男性像を求めていないようである。それは平等意識の現われというより、彼女たちがそのような男性像を期待していないとも解釈できる。

20代の女性が30代よりも平等志向が低調なのは、伝統的性役割の神話に対する期待度がまだ30代より高いということかもしれない。

さらに、これら若い女性たちよりも「女らしさ」「男らしさ」の神話を固持しているのは男性たちであることは、表６の平均値の差を見るまでもない。「女の時代」といわれるが、果して女自身が望む「時代」の到来なのだろうか。

本調査の一部で示唆された男性と女性の意識をどうとらえるかはつぎの二つの解釈が可能である。第一に、それらは一般論に対する態度であって、現実の

中で個人のとる態度と平等意識との格差はかなりあると解釈するものである。第二の解釈は、一般論であっても平等な態度の否定が一応むづかしくなってきており、それは固定的な性役割の見直しにつながるというものである。ただし後者は、それだけ差別がみえにくくなったとも考えうる。

しかし上記のいずれの解釈をとるとしても、固定化した性役割はまだかなり根強く残っていると考えられる。

その理由として、こうした「女らしさ」「男らしさ」からの逸脱に対して様々な社会的抑制があるだけでなく、女性自身の中にもそれらに対する抑制があると推察されるからである。女性を「女の居場所」に引き止どめる役割を果たすものとして、先に述べた「罪悪感」の他に「ものわかりのよさ」(Schaef, 1981)があげられる。これら女性を伝統的性役割につなぎとめる心理的メカニズムの解明が今後の課題となってくるであろう。

引用文献

朝日新聞「国民意識探る本社世論調査」1988年1月1日

東清和. 小倉千加子『性役割の心理』大日本図書、1984

Freeman, J., The women's liberation movement: Its origins, organizations, activities, and ideas. In J. Freeman, ed. *Women: A feminist perspective.* Mayfield, 1979

婦人教育研究会『統計にみる女性の現状』垣内出版株式会社、1987

平野貴子「職業と女性」女性学研究会編『女たちのいま』勁草書房、1984

コマロフスキー、M.,(池上千寿子、福井浅子訳)『男らしさのジレンマ：性別役割の変化にとまどう大学生の悩み』家政教育社、1984

黒木雅子「日米の文化比較からみる日系アメリカ人の性役割」『女性学年報』7号、1986

Laws, J. L., & Schwartz, P., *Sexual scripts: The social construction of female sexuality.* Dryden Press, 1977

Malamuth, M. Neil, Human Sexuality. In Perlman, D., and Cozby, C. P., ed. *Social Psychology.,* Holt, Rinehart, and Winston, 1983

マリン、ジーン『ほんとうの女らしさとは：男のためのウーメンズ・リブ』(道下匡子訳)朝日新聞社、1975

ミュルダール、A.,V.クライン(大和チドリ、桑原洋子訳)『女性の二つの役割』ミネルヴァ書房、1985

日本婦人団体連絡会編『婦人白書』ほるぷ出版、1988

Schaef, W. Anne, *Women's Reality: An Emerging Female System in a White Male Society,* Harper & Row, Publishers, 1981

Summers, Anne, 25 Years That Shook The World, In *MS.* December 1988

総理府広報室編『月刊　世論調査：女』大蔵省印刷局、9月1987

高橋道子「母親および女性の就業に関する大学生の意識と母親の就業経歴」『東京学芸大学紀要』1、37、1986

善積京子「性規範にみる女性差別—若者の意識調査を中心として」『女性学年報』4号、1983

Summary

Feminist Analysis of the Traditional Sex Roles Across Generations and Gender

Masako Kuwaki Kuroki

The purpose of this this study was to explore the attitudes toward the traditional sex roles across generations and gender, drawing on empirical findings from the author's survey conducted in 1985. The subjects of the survey are 136 women and 22 men aged from 20s to 60s who enrolled in a training course in a private school for adult education. The data are supplemented by other research for the further investigation of the traditional sex roles in various social settings.

The results of this investigation show that there are significant differences among generations of female subjects: the subjects in their 30s show that the percentage of those who have a feminist orientation is highest among four groups, subjects of 20s, 40s, 50s and above. Although the second highest percentage is shown by the subjects in their 20s, a tendency to conservatism in some sex roles is seen in this group. In the group aged above 50, no subject shows a feminist orientation.

They also show that there is significant difference between the sexes. This study supports the results of many other studies which have indicated that men are more likely to hold on to the traditional sex roles.

In addition to the analysis of sex roles across generations and gender, the author considers whether there is a significant difference between two women groups, those who are employed, either full-time or part-time, and the non-employed. The result suggests that the feminist orientation has no direct relation to the fact as to whether they work or not.